

『ファニーたい焼きトム51 カリー  
ーブルスト』

第一幕：導入

場面1：たい焼きトムの朝（東京の商店街の一角にある『たい焼きトム』。開店準備中の店内）

トム（エプロン姿で元気よく）「オッハヨウ、魚住！今日もファニーなたい焼きで世界を驚かせるよ！」

魚住（ため息交じりに）「おはようございます、トムさん……。まさか、また変なたい焼き作る気じゃ？」

トム（得意げに）「今回は『カリーブルストたい焼き』だ！」

魚住（目を見開いて）「えっ！？カリーブルストって……。あのドイツのソーセージにカリーソースかかったやつ！？」

トム（満面の笑み）「そうだ！パリッと  
ジューシーなソーセージに、スパイス香  
るカレーソースをたっぷり！しかも、そ  
れをふわふわもちもちのたい焼き生地で  
包むんだ！」

魚住（眉をひそめて）「……甘い生地と  
カリールブルスト、合うんですか？」

トム（大きさに胸に手を当てて）「人生  
は挑戦だ、魚住！そして、この挑戦の先  
に、新たな味のパラダイスが待ってい  
る！」

**場面2：試作の時間**（キッチンで試作す  
る二人。トムが得意げに生地を流し込み、  
ソーセージとカレーソースを投入）

魚住（心配そうに）「……このカレーソ  
ース、めっちゃくちゃ濃厚じゃないです  
か？甘みもあるし……」

トム（目を輝かせて）「そうさ！このカレーソースには、ハチミツとリンゴを加えてコクを出してる！ソーセージの脂と絡めば、甘じょっぱくて濃厚なソースが口いっぱい広がるんだ！」

魚住（恐る恐る）「生地の中にソーセージ入れると、カリカリ感なくなるんじゃない……？」

トム（ウインクしながら）「そこは計算済みさ！仕上げにたい焼きを焼き上げる直前、高温で一気に焼き上げる！すると、表面はサクサク、中はもっちり、ソーセージはジューシーなまま！絶対ウマイって！」

（試作完成。二人で試食）

魚住（一口かじる）「……！」

トム（ドヤ顔で）「どうだ！？生地ふわふわ感、そこに広がるスモーキーなソーセージの肉汁！そして、トドメのスパイシーなカレーの刺激！まさに三重奏！」

魚住（目を丸くしながら）「う、うまい……！想像以上にハマる！甘じょっぱくて、カレーのスパイスが食欲をそそる！」

## 第二幕：販売開始と大行列

場面2：予想外の大反響（店の前には長蛇の列ができています）

魚住（驚愕しながら）「え、ちょっと待ってください！なんでこんなに人が……！？」

客1（目を輝かせながら）「んんっ！？なんだこれ！？」（たい焼きを半分に割る）「熱々のソーセージの肉汁がじゅわ

っと！カレーソースがとろけて、香りが鼻に突き抜ける……！」

**客2**（恍惚とした表情で）「はああ……サクツとした生地の上に、パリツとしたソーセージ……。甘さとスパイシーさが絶妙に絡み合って、口の中がヨーロッパ旅行だ……！」

**客3**（感動で声を震わせながら）「これは……ドイツビールが欲しくなる……！いや、ビールじゃなくても、このたい焼き自体がメインディッシュだ！」

**客4**（涙ぐみながら）「俺の舌が、ついに本当のグルメと出会った……！たい焼きよ、こんな形で俺を泣かせるとは……！」

（店内は興奮の渦に包まれる）

### 第三幕：王侯貴族の来訪

### 場面3：特別なお客様

（高級スーツを着た男性と、エレガントなドレスの女性が店の前に立っている。

SPらしき男たちが周囲を見張っている）

魚住（ひそひそと）「あれ、なんかすごい人たちが来ましたけど……？」

トム（首をかしげて）「おお、セレブなお客さんか？ようこそ！」

貴族風の男性（にこやかに）「私は某国の王族、カール・フォン・シュタイン。SNSで貴店の評判を聞き、ぜひ味わいたくなりましてね。」

（トム、即座にたい焼きを手渡す）

トム「へい、殿下！熱々のカリーブルストたい焼き、お楽しみあれ！」

（カール、慎重に一口かじる）

カール（目を閉じてしばし沈黙。そして、突如として目を見開く）「これは……！」

（SPたちも緊張する）

カール（深く息を吸い、瞳を潤ませながら）「祖国の街並みが、口の中に広がる……！ 幼少期に、広場の屋台で食べたあの味だ……！ 美しい！ こんなにも愛に満ちたカリブールストを、私は初めて食べた！」

（周囲のSPや付き人たちも、驚きながら拍手を送る）

魚住（ぽかんと）「王族を泣かせるたい焼きって……どんな料理ですか、これ……！」

カール（感動しながら）「トム殿、ぜひ我が祖国に来て、この素晴らしいたい焼きを広めてはいただけませんか？」

トム（即答）「もちろんさ！オレのたい焼きは世界を旅するんだ！」

（周囲の客たちが大歓声を上げる）

#### 第四幕：ドイツ大使館の食事会

#### 場面4：豪華な食事会

（ドイツ大使館の広間。壁には歴史的な絵画が飾られ、シャンデリアが輝く。長いテーブルには高級料理がずらりと並び、その中央に、金色の大皿に美しく盛りだたたい焼きの山が鎮座している。）

（各国の要人たちが集まり、格式高い雰囲気漂うが、たい焼きの存在に興味津々な様子が見て取れる。）

カール（上機嫌に）「皆様、これが日本からやってきた奇跡のたい焼き、カリールブルストたい焼きです！」



（給仕がナイフでたい焼きを切り分け、ゲストの前に置く。湯気が立ちのぼり、カレーのスパイシーな香りが広がる。）

客1（ドイツの外交官）（ナイフを入れると、ジュワツと肉汁があふれ出る）

「……これは……！外はカリッと香ばしく、中からはスパイスの効いたカレーソースが滴る……！」

（ゆっくりと口に運び、一口噛むと、思わず目を見開く。）

「パリッとしたソーセージが弾けた瞬間、カレーソースのスパイスが舌に絡み、甘い生地と絶妙に調和している……！これはワインに合う！」

客2（著名なシェフ）（じっくりと味わいながら）「うむ……甘みと塩気、スパイスの融合……この味のバランスはまさ

に芸術だ！ストリートフードの枠を超えている！」

**客3**（貴族の婦人）（恍惚とした表情でため息）「ああ……まるでベルリンの街角の活気が蘇るわ。幼い頃、お祭りの屋台で食べたあのカレーブルストを思い出す……。懐かしさと新しさが共存する味！」

（目を細め、ゆっくりと味わう。）

**客4**（ドイツの食文化研究者）（目頭を押さえながら）「これは歴史の再発見だ……！日本のたい焼きとドイツのカレーブルストがここまで調和するのは……！私は今、文化の融合を味わっている……！」

（会場は拍手と歓声に包まれる）

カール（満足げに）「トム殿、あなたは日本とドイツを結ぶ架け橋になりました！これは国際的な革命ですよ！」

トム（笑顔でガッツポーズ）「イエス！たい焼きは世界を繋ぐんだ！」

（場面転換）

## 第五幕：日本への帰国と新聞報道

### 場面5：たい焼きトムの店内

（トム、店のカウンターで新聞を広げている。表紙には『日本人を驚かせたい焼き職人、ドイツをも制す！』の見出しが躍る。新聞には大使館での食事会の写真が掲載され、トムが王侯貴族と握手する姿が映っている。）

（常連客たちが新聞を覗き込み、興奮気味に話している。）

常連客1「トムさん、すごいじゃないか！  
国際的なたい焼き職人になっちまった  
な！」

常連客2「俺たちのたい焼き屋が、ドイツの王族に認められたなんて……！」

魚住（新聞を覗き込みながら）「すごい  
ですね、トムさん。ドイツで大成功じゃない  
ですか！」

トム（ぐったりした様子で）「うーん、  
でもさ、宮殿みたいな会場、豪華な食事、  
貴族たちの上品なマナー……。正直、肩  
が凝ったよ……！」

（魚住、クスツと笑う）

魚住「まあ、王族に絶賛されるたい焼き  
なんて、普通じゃ味わえない経験ですよ  
ね」

（店の外から、新しいお客が来る気配。）

新規客「すみません！ドイツで話題になったたい焼き、食べられるって本当ですか！？」

（トム、即座にエプロンを締め直し、満面の笑みで立ち上がる。）

トム「もちろんだとも！さあ、今日もフアニーなたい焼きを焼くぞ！」

（魚住、呆れながらも笑い、店は再び活気に包まれる。）

（終）

・ 第一幕（導入） ～15分

たい焼きトムの店とキャラクター

紹介

「カリーブルストたい焼き」を思い  
つく経緯

・ 第二幕（販売開始と大行列） ～20分

お客のリアクション（飯テロ描写  
人分）

評判の広がり、SNSで話題に

• 第三幕（王侯貴族の来訪）（20分）

ドイツの王侯貴族が来店

たい焼きを絶賛し、涙を流す（飯テロ描写）

トムがドイツ行きを決意

• 第四幕（ドイツ大使館の食事会）（

20分）

豪華な食事会の風景

王侯貴族や外交官が絶賛（飯テロ描写）  
写4人分）

トムのたい焼きが文化交流の架け  
橋に

- 第五幕（日本への帰国と新聞報道）

10分

日本に戻り、新聞で話題に

トムの苦労話とオチ

新規客の来店、再び営業開始